



TITLE:

<批評・紹介>吉澤誠一郎著「天津  
の近代：清末都市における政治文化  
と社会統合」

AUTHOR(S):

高嶋, 航

---

CITATION:

高嶋, 航. <批評・紹介>吉澤誠一郎著「天津の近代：清末都市における  
政治文化と社会統合」. 東洋史研究 2002, 61(2): 346-355

ISSUE DATE:

2002-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155420>

RIGHT:

吉澤誠一郎著

## 天津の近代

清末都市における政治文化と社會統合

高嶋 航

著者吉澤誠一郎氏は、現在東京大學で教鞭をとる若手の近代史研究者である。本書は著者が清末の天津について、一九九二年から十年間にわたって發表してきた論文を集めたもので、その内容は政治、社會、文化の様々な面に及んでいる。扱う対象は驚くほど多様だが、讀後には散漫とした印象はない。著者の力量が感じられるところである。扱う対象は違っても、本書の問題意識の基調をなす旋律が隨所に形を変えて現れ、徐々にイメージが肉付けされていくからであろう。それは著者の想定する多様性から類似性へという近代のあり方をそのまま反映しているように思われる。本書で扱われた問題の多くはいずれも分厚い先行研究のある領域だが、著者はいささか視點を變えることによって新たな問題意識を引き出している。一つのテーマについて多様なトピックをとりあげ、大風呂敷を廣げておきながら、最後にうまく纏め上げる手並みの鮮やかさには、何度も感心させられた。以下、各章ごとに評者なりのまとめと感想を述べていきたい。

緒論では、一九世紀以降の天津の變化にみられる新しい要素を「近代性」として理解し、清末の都市における政治文化と社會統合の歴史的變化を考察するという本書の視角が提示される。著者の想定する近代とは、西歐近代に向かって收斂するものではなく、それをもその一部として含むようなものであり、明確な實體・方向をもたない。著者の言葉を借りれば、「近代とは、世界各地での類似性の擴大の傾向が多様性を凌駕してゆく時代」（六頁）であった。そしてこの「類似性」が「近代性」なのであり、本書では以下の四つの觀點から「天津の近代」を描き出す。①政治参加と公共性。自治權の有無、王權との對抗というウェーバー流の問題設定にしばられてきた從來の都市研究を、その呪縛から解き放つ試み。都市公共性の展開を、地方政治の構造の中に、「公」と自稱する發言主體・政治主體が叢生し競合する狀況が誕生したことに見出す。②社會管理の進展。都市にとって社會管理は本來的に不可欠なものであり、決して近代特有のものではない。それを西歐的「市民社會」論や中國固有の制度的展開といった從來の問題意識にとらわれることなく、新たな視點で見直す。③國民意識の深化と歸屬意識の再編。ナショナリズムがいつどのように形成されたのか、「中國」「中國人」といった意識は同郷團體によって分節化された都市社會とどのような關係にあるのか。都市がナショナリズムを自ら導き出したという視角がここで提起される。④啓蒙と民衆文化。政治と並んで文化がいかに社會を統合していたのか。十九世紀の政治秩序における民衆文化は未だ明解な位置づけがなされていない。こうした觀點から眺めると、清末は、知と學習をめぐる制度・裝置の變化を背景に、民衆文化が「迷信」と

して非難され、都市の急速な文化變容が農村部と乖離・齟齬をきたした過程として描かれる。

## 第I部 地域防衛を支える價值觀と記憶

第一章「團練の編成」は王朝護持の理念と地域防衛の關係に着目しつつ、『張公襄理軍務紀略』の主人公張錦文の視點から天津の團練を検討する。そしてウィリアム・ロウが提示した、社會的に生み出された武裝組織である團練は都市自治體としての共同意識の存在によつて統一的組織となりえた、という見方に異議を唱える。なぜなら著者が天津の團練に見出したものは、團練の「統一的」様相ではなく「分散的」傾向だったからである。二次にわたる鴉片戰爭と太平天國がもたらした危機にさいして、地域防衛のため天津で組織されたのは、指揮系統が不統一な複数の武裝集團であつた。各團練は互いに干渉することもなく、それぞれのやり方で役割を果たし、指導者たちは事後に朝廷から褒賞（ときに懲罰）を與えられた。著者は團練の分散的状況を生み出した背景には、褒賞と財源の問題があつたと考える。天津の場合、鹽商たちが大きく寄與するが、彼らの官との関わりの深さは、團練を天津という「都市」ではなく「王朝」に結びつけることになった。團練は地方自治體の成立を示すものではなく、一時的な「衆志成城」状態を創出したにすぎない。

天津の團練がロウのいう都市共同體意識（urban community consciousness）を體現したものでないことは本章の考察で明らかになった。問題は「ロウと別様の回答を與えよう」（三九頁）という際の「別様の回答」は天津にのみ限定されるのか、それと

も漢口にも適用できるのか、という點である。注六八で「他の地域の團練組織が恒常的な地方行政機關となつた點に注意」とあることから、天津での議論は漢口におけるロウの團練論ひいては都市論を否定するものではないことが想定されるが、ではなぜ天津と漢口では狀況が異なるのか。天津と漢口の違ひとして即座に思ふ浮かぶのは「王朝」との距離である。天津は府、縣衙門が所在するほか、長蘆鹽政、長蘆鹽運使、三口通商大臣、天津道、天津海關道が駐在し、直隸總督李鴻章が政務をとるなど清朝官僚との關係が深かつたのに對して、漢口にはそうした行政機關が存在しなかつた。他にも危機のあり方など様々な相違點が挙げられるのか、吉澤團練論（もしくは天津團練論）はどう位置づけられるのか、言及が欲しいところだ。ともかく團練の性格について複数の視點が提供されたことで今後の研究が大いに深まるのは間違いない。

第二章「火會と天津教案」では、有名な天津教案を火會と呼ばれる消防組織との關係から再考する。歐文文獻と漢文文獻の雙方を照らし合せて、漢文文獻が意圖的に火會の關與を伏せようとしていたことを指摘する。さらに通説に反し、事件が組織的計畫的に遂行されたと推定する。それは、火會が地元有力者が無頼や零細商人など下層民を組織した「義舉」であり、火會の關與を示すことにより、「火會紳士」ひいては事件處理を擔當し報告書を作成していた知府・知縣自身が責任を問われかねないからであつた。そこで朝廷への報告においては無頼集團を前面に出すが、この無頼集團はほかならぬ火會や團練の構成員と大幅に重なり合っていたのである。また教案の發生した原因について、從來はカト

リックと郷紳のあいだの價值觀の相違が考えられてきたが、著者は、活動の類似性こそが原因だとする。そもその發端はカトリックが運営する仁慈堂をめぐる流言にあり、その慈善活動は「義舉」と直接対抗する側面を持っていた。兩者の關係は、「教會と傳統王朝との權威構造との對決といった圖式」（八八頁）ととらえられるが、著者の關心はむしろ王朝秩序と地域社會をとりむすぶ排外主義に見られる政治統合のあり方にある。それこそ地域的紛争が國家間の緊張へと容易に擴大した背景だった。

本章では繰り返し火會と團練の關係が示されている。評者は以前、清代の消防について論じた際、消防と軍隊および團練との關係について今後の課題にまわしたが、この宿題は未だ果たされていない。<sup>(2)</sup> 著者の言うとおり、火會と團練がオーバーラップしていたのは間違いない。火會はお互いの對抗意識が強く、往々にして消火をそつちのけにして火會同士の諍いを引き起こした。そこで清末には各地で救火聯合會が生まれた。また、天津の火會の構成員であつた無頼も徒黨を組んで喧嘩をもつぱらにしたという。評者の疑問は、天津の團練が果たして著者が前章で描いたように「相互に鬭争することなく並存しえた」（五七頁）のかという点にある。火會としては對立するが、團練としては對立しないというようなことが起きたのか。あるいは火會と團練は異なる組織原理を採用していたのか。未曾有の危機が内部對立を消滅させてしまったのだろうか。

第三章「光緒初年の旱災と廣仁堂」では清末に創設された廣仁堂をとりあげ、善堂およびそれを取りまく環境の變化を浮き彫り

にする。天津には官や鹽商が出資・運営する多様な慈善施設が存在していた。光緒初年、華北に大旱魃が発生すると、大量の難民が出現し、人身賣買が活潑になった。彼らは汽船で上海へ賣られたが、その上海の士紳が人身賣買の根を絶つべく天津に設けたのが廣仁堂であつた。廣仁堂は寡婦とその子供を收容するのが目的で、「南省章程」を範とし、職業教育を施すなど、從來の天津の善堂にはない特色を持っていた。李鴻章の命により地元有力者も運営に参加させられるが、北方への蔑視や江南式の運営に對する反發から、彼らの活動はきわめて消極的であつた。從來のように民間慈善事業を官とは別個の運営主體の形成ととらえるのは十分ではない。官の「強壓的」動員を可能にするのは、善堂理念についての了解において官民に大差がないことにあり、むしろ善堂は「理想的な社會を作るために正しいと信じる價值觀を普及しようとする宣傳の裝置だったのではないか」（一六頁）と提起する。

著者は、官から自立した民間人の領域として善堂をみるのではなく、理想的社會實現への價值觀を普及する宣傳裝置としてとらえる。<sup>(3)</sup> 從來とは一味違う解釋で、善堂の新しい側面を垣間見させてくれるが、それでもなお全ての事象を説明できるわけではない。官民で善堂の理念に共通の理解があることと、強壓的動員がなされることにはどういふ關係があるのだろうか。南方人が天津において力を蓄えつつあつたこと、北方人に對するあからさまな蔑視が章程に盛り込まれていたことを考え合わせると、廣仁堂は南方人の威信を天津に確立しようとした側面が大きかつたのではないか。著者が通俗的解釋を排しようとしているのはわかるが、義舉が威信を示すものであつたことは著者も述べておりで（八〇頁）、

廣仁堂がその威信を示すために天津の紳士を動員したと考えるほうが自然ではないか。

第四章「義和團支配と團練神話」は、すでに大量の研究が蓄積されている義和團の問題について、都市天津における歴史的記憶という観点から再解釋する。義和團勃興の主要因の一つに早魃が挙げられる。官が祈雨する場である「壇」と義和團が據點とした「壇」との間には連續性があり、そこに兩者の親和性が見出される。すなわち、義和團はそもそも「反権力性」「反體制的性格」を持つものではなく、「あるべき官の行動を暫時的に代行・協助しようとした」(一五〇頁)にすぎない。そこで目前の権力(知縣)に對抗しつつも、あるべき権力のシンボルである王朝と直接結びつくという奇妙なねじれが生じたのである。著者は明言しないが、義和團が壇を裁きの場としたことは、彼らの權威・権力の據つて来る所をよく示している。天津は鴉片戦争以來たび重なる危機を経験してきた。そのたびに防衛に立ち上がったのは團練であり、義和團戦争においても、義和團や團練にそうした役割が期待された。しかし「歴史的記憶」あるいは「神話」の反復は、戦争における敗北によって断ち切られ、祈雨の如き官民の接點が失われた。王朝そして都市エリートが近代化の道を歩む一方、官との回路を失った民衆は民變を頻發させていく。

ここで都市天津の「歴史的記憶」と對比させるために、評者がかつてフィールドとした蘇州近郊の洞庭東山の事例を紹介したい。同地では劉猛將神の信仰が盛んで、正月月上旬に全島規模で神輿の巡行が展開される(「猛將會」)。出巡の隊列はまず衝鋒帥旗が來

てその後に祝禱の旗幟、そして鑼と傘が交互に並ぶ。傘の後には猛將神、最後に大纛旗が數本から數十本續く。猛將會では潦里村に特別な地位が與えられているが、それは昔官府に反抗した際、潦里の人がイニシアチブをとったという傳説による。『洞庭東山志』によると明嘉靖年間の高寇、明末清初の湖寇、民國期の匪賊らを撃退する際、猛將會の隊列と「出燈」(燈を掲げて隊列に加わる。「潦燐」「潦反」ともいう)が利用されたという。旗傘を掲げ銅鑼を鳴らして巡行する様はあたかも軍隊の行進を思わせる。實際、祭祀で培われた規律と組織が戦争に生かされた(とされる)のである。『洞庭東山志』は言及しないが、太平天國軍を撃退する際にも、潦里の人がまず決起し、諸村の人が従ったという。都市天津とちがって人口移動がそれほど激しくない農村部では、何世紀も前の出來事が祭祀という形で保存され、再現されてきた。天津では新しい神話が作られ、消えていったが、農村では辛亥革命以後もながらく神話が生き續けたのである。

## 第Ⅱ部 行政機構の革新と社會管理

第五章「巡警創設と行政の變容」は、巡警創設を都市行政が變容していく過程の中に位置づける試みである。義和團の亂にともなう列強の天津支配が終息した光緒二十八年、列強の警察機構を繼承した巡警組織が創設された。巡警は街路に點在する「崗」に派遣され、治安維持とくに街路の秩序維持にあたり、簡易裁判をも行った。そもそも裁判は知縣の職務であり、巡警の關與は行政體系をゆるがすものとなる。しかし民間社會への浸透度の高い巡警は、縣衙門と競合するのではなく、縣衙門と相補的關係にあつ

たと考えられる。巡警局をはじめ清末に新設された諸官衙は、包括的行政機關であつた從來の縣衙門の行政の一部を擔うことにより、縣衙門の存在を相對化しつつ、行政の機能擴大をもたらしただのである。巡警は從來の統治理念を體現して、調停者、教化者としての役割を期待されたが、一方で民衆の信仰と深く結びついた從來の統治理念を否定したところに成り立つ「文明」的裝置でもあつた。

本書を通じて巡警には高い評價が與えられている。巡警は官權力を隅々にまで浸透させ新政の様々な施策を可能にしたからである。天津で巡警が確立しえたのは、袁世凱というキーパーソンの存在、都統衙門の巡捕制度、清國軍隊の駐屯禁止にくわえて、空間秩序の變容も一つの要因と考えられないだろうか。都統衙門期に城壁が撤廢されたことにより、管轄範圍が點（城門）から面（街路）へと擴大した。また縣衙門の行政機能の相對化により都市の政治空間に變動が生じた。こうして再編成された空間（これが近代的都市空間と呼べるかどうかはわからないが）に相應しい治安維持機構として巡警が機能した。それは陽界と陰界が重なり合う空間をも一元化してしまつた。空間という見方が都市の近代あるいは副題の政治文化と社會統合を理解するに當たつてどれだけ有効かはわからないが、考慮に値する問題ではないかと評者は感じる。それにつけても、本書に天津の地圖が附されていないのは残念である。

第六章「捐」と都市管理」では、財政史の対象であつた「捐」を、都市行政、とくに管理という側面から読み直す。捐について

は、新政の財源捻出と商工業課税による近代的財政への移行という二様の見解がなされてきた。ところが、街路の物賣り、人力車夫、妓女ら都市下層民への課税は、以上の論理では十分に説明できない。都市下層民に對する課税は、税源としてではなく、秩序の攪亂要因となりやすい彼らを管理する意味を持っていた。著者が「めこぼしの代價」と表現する「捐」は、一面で近代的な論理を標榜しつつ、一面で現實と妥協することにより、官權力の擴大を正當化するものであつた。そこからイメージされる都市の秩序とは、居住や營業の自由といった包括的原理に基づくオーブンなものではなく、官との個別的な互酬關係の束としてとらえられる。こうした論理は前近代にも見られるが、清末天津のすぐれて近代的な特徴は、それが巡警組織という強制力を伴うものであつたことにある。

巡警に象徴される都市空間は、「何でもかんでも新政で、しかもものことなどお構いなし」（二〇八頁）というように、しもじもにとつて決して住みやすい場ではなかつた。本來排除されるべき彼らが「目こぼし」してもらうために支拂つたのが捐で、それは治安の攪亂原因である彼らを管理・統制するものであつた。捐を新しい視點からとらえたものとして注目されるが、ただ巡警による管理・統制の有效性については慎重を期さねばならない。たとえば戸口調査はどれだけ實態を把握していたのか、評者には氣になるところである。それと、物賣りたちが工程局から廣い場所へ移るよう指示されて、「これに従えば、物賣りたちが一か所に集まって賣買し分散してしまつて商賣が成り立たなくなかなかねない」（二〇五頁）という一節は意味がわかりにくい。おそらく、

狭い場所に店が集中しているから商賣になるのであって、廣い場所にはつんばつんと店があるようでは商賣にならなくなるといふ意味ではなからうか。字句が抜けているのかもしれない。

第七章「善堂と習藝所のあいだ」は、清末の善堂改革を理念の變化という視點から再考する。袁世凱が司法制度を改革するなかで、光緒三十年六月、懲役刑執行の場として新たに習藝所が誕生する。犯罪者や遊民に様々な職業教育を施し、彼らを更正することが目的であった。一方、當初人身賣買の對策として創設された寡婦收容施設である廣仁堂でも、光緒三十一年十二月に女工廠が開かれ、職業教育が始まった。そこでは助産婦養成の提案も行われた。結局これは實現しなかったが、その中で、貞節を守る生活を「無意味」と全面否定している點が注目される。一見、善堂の存在根據をゆるがしかねない議論ともとれるが、善堂が運営者の理想とする人間像を提示し普及するための教化施設であったと考へれば、善堂をめぐる理念の變化にもかかわらず、一貫して理想の人倫を達成すべく努力していた運営者の姿が浮かび上がってくる。同様の改革は育嬰堂でも展開された。本來まったくことなる目的をもつ善堂と習藝所の「あいだ」は、こうして縮まった。それは社會的管理の強化として捉えるよりも、むしろ社會的救済に對する理念の變化であり、その背景に實業振興や刑務改革といった時代の流れがあった。

「論設女犯習藝所」によれば、女犯習藝所とは女性の惡根性を實業・道德教育によって治す施設であった。しかしあまり普及しなかったらしい。一方、女工廠はより早くから創設されているが、

これは女權運動（とりわけ女子教育）の高まりを直接の契機として生まれたものである。よって評者は廣仁堂や育嬰堂の女工廠を刑務改革や習藝所と結びつけることには躊躇を覺える。また、麥信堅の「ただ無意味に生きて一生を終えるよりは、教育を施して収入源を得させるほうが好ましいはずです」という件を「貞節など無意味である」と理解する點も同意できない。これは貞節を前提とした上で、ただ人に頼って生きていくよりは、自ら働いて生きたほうが更によい、と言っているのではないか。著者はこの點に善堂の變化を見出そうとしているが、果たして當時、善堂關係者の間で貞節の否定をもって「理想的な社會」と考えるものがあったらうか。清末の女權運動では纏足解放と女子教育が焦點となったが、女子教育はおおむね貞節を強化する方向に作用したし、纏足解放でさえ貞節と矛盾するものではなかった。

### 第三部 愛國主義による社會統合

第八章「抵制美約」運動と「中國」の團結」は、光緒三十一年に天津で起きた對米ボイコット運動の考察である。從來の研究がこのボイコット運動を見る際に暗黙の前提としてきた「民族」「國民」といった概念は、實はこの事件を契機に廣く受容された。そこで、著者は「民族」「國民」といったチームで運動を分析するのではなく、むしろ「國民」意識が喚起される過程を追う。天津では商・學・報の各界がボイコット運動を率いた。成立まもない商會にとって、ボイコット運動は組織としての力量を示す絶好の機會だったが、結局官の壓力に屈してしまう。一方、『大公報』は積極的に運動を推進した。しかし多數の人々を運動に驅り立て

るのに大きな役割を果たしたのは、文字を読めない人に新聞記事の内容をわかりやすく読み聞かせた閲報處や宣講處であつた。それは従來の講談や聖諭の宣講を否定し、「民智」向上、「國民」創出をはかる啓蒙機關であつた。ボイコット運動は、同郷や同業といった枠を越えた人々を結びつけた。それは、各地からの出身者が集まる都市社會に適合的な論理であつた。「國民」とはきわめて都市的な產物であり、ボイコット運動は義和團の野蠻な行爲とは對照をなすものであつた。

義和團のむき出しの排外感情は、數年後には文明の作法に則つたボイコット運動となつた。著者はここにナショナリズムと新しい都市型エリート<sup>(1)</sup>の誕生をみる。もちろん、外國製品<sup>(2)</sup>のボイコットが直ちに、そして本質的にナショナリズムに結びつくのではない。それはきつかけにすぎず、その下地は着々と整備されてきていたのである。ナショナリズムを安易に革命に結び附けないところに、著者の問題意識が感じられよう。なお、著者にはほかに「ナショナリズムの誕生——反アメリカ運動（一九〇五年）にみる「中國人」意識と同郷結合」という論文がある。廣東や上海などの狀況も紹介しており、本書とあわせ讀むと理解が深まる。

第九章「電車と公憤——市内交通をめぐる政治——」では、清末に登場した電車が引き起こした反對運動を「微視的」に觀察することを通じて地方政治のあり方を論じる。天津ではベルギーの資本により電車が敷設されたが、光緒三十二年一月二十三日の開通以前から、電車によって生計を奪われる人力車夫らを中心に反對運動が起つていた。電車の開通とともに事故が多發したが、

とりわけ宣統三年閏六月二十二日に巡警が轢かれて負傷した事故では、「公憤」に驅られた群衆が暴動を引き起こすに至る。さらに事後處理の際の電車公司の強硬な態度が「公憤」に火を注ぐことになる。民意を代表して折衝にあたつた巡警道、天津城董事會、商務總會は、斷固として公司に屈しなかつた。これら新しい政治主體は、民意を代表することによってその政治的意義を發揮し、政治的意志が多數の回路によって表明される狀況が生み出される。しかし「公憤」は民意の多様性を消し去つてしまふ。それが地域の一體感、ひいてはナショナリズムを生み出す原基となつていく。民意によつて成り立つ「公憤」の政治はナショナリズムを必要とし、これを内在化させたのである。

急速に擴大しつゝあつた行政の閒隙に生まれた地方自治組織、商務總會、巡警組織などはきわめて曖昧な存在であり、その果たすべき役割、力量についても明確な合意があつたわけではない。彼らは威信の源を地域社會の中に求め、それが「公憤」の政治を生み出した。では、これら政治主體にとって「公憤」の政治とはどれくらい本質的だったのだろうか。とくに巡警組織がどれくらい民衆の支持を得、また彼ら自身が支持を得ようとしていたのだろうか。すでに第五章で、争いを調停する巡警、民間信仰を否定する巡警、また十章では壬子兵亂になすすべもない巡警が描かれてきた。民衆に對する態度は多様であり、また民衆が巡警をどう見ていたのかも明確ではない。本章で扱つた電車公司に對する巡警の態度というのは、組織的なものか個人的なものか。たまたま民衆の期待に合致したのか、常にそれを意識して行動していたのか。また商務總會や地方自治組織と同列に論じることができるのか。



（結論では地方自治制度と商會は「政治参加と公共性の展開」に、巡警は「社會管理の進展」の項に分類されている）。いくつか疑問は残るものの、著者の提示する巡警像は極めて新鮮で、從來の認識を一新するものであらう。

## 第十章「體育と革命——辛亥革命時期の尙武理念と治安問題

——」は、清末の「尙武」精神稱揚の潮流の中で誕生した天津體育會をとりあげる。天津體育會は宣統二年十一月末に成立した。

社長は楊以德、巡警組織の要人である。これを見てみわかつとおり、官との関係は密接であり、だからこそ公然と軍事訓練をすることができた。武昌における革命派の蜂起により社會不安が増大する中で、體育社は治安維持に携わるようになる。これには革命派鎮壓という楊以德の政治的意圖も含まれていた。同じ頃、戦地での救護活動にあたる天津紅十字會という組織も成立していた。

敵味方を問わず、負傷者を西洋醫學による治療で救おうという同會の活動は、軍人の尊重とあいまって從來の戦争観、身體觀を大きく變えるものであった。しかし民國元年三月二日におこった壬子兵亂では、水會を再組織した水團、巡警、體育社、保衛局は無力さを露呈し、軍人の暴舉から天津を救うことができなかったのである。

清末の新しい事象は革命との関係で見られることが多い。しかしその多くは、革命をも含む大きな時代の流れの中に位置づけるべきものである。本章で検討される「體育」「軍國民」「尙武」もまさにそうしたものの一つである。天津は辛亥革命の主要舞臺から外れていたがゆえに、依然革命中心の近代史のマスターナラテ

ィブに異議を申し立てることが可能になる。マスターナラティプが象徴的（と考えられる）事象だけを選択して構成されるのに對し、一貫して天津という場から近代を眺めたとき、そこに違った光景がうかがいがつてくるのは當然であり、著者の方法論が成功した所以でもある。天津のケースがどこまで他地域に適用できるかは、これからの課題であらう。都市の中で（南門外が天津においてどういう意味を持つのか評者は知らないが）、公開演武という形で尙武の「國民」が可視化されたことは、單に言論による「國民」創出とはまた違った意味を持つ。しかし強國の基礎となる理想的「國民」が軍隊の前にまったく無力であったという構圖は、不幸にしてその後もたびたび出現することになった。なお、「體育社」と「體育會」という語について、使い分けが不明瞭な箇所がある。體育社は天津體育社のこと、體育會は全國的に見られた同様の會もしくは社團としての體育社を指していると考えられるが、明確な説明が必要かと思われる。

「風俗の變遷」と題された補論には、これまで扱ってきた救火會、團練、善堂、巡警にまじって惜字、宣講、義學、在理教、天后や城隍の祭り、新聞といった事象が並べられている。當時の人々に「風俗」として扱われるこれらの事象は、あるべき秩序を示す手がかりを與えてくれる。あるべき秩序から外れた事象を善導の對象とみなすことで、自らを統治者の側におくという形式は從來の善舉にも見られた。しかし基づく價值觀は、善書にみえる因果應報的なものから近代的なものに變化した。そこに從來とは異なる社會・文化統合が生まれ、新たな「風俗」が形成される。

天津で風俗の變化が急速に起こつたのは、科擧廢止など知をめぐ  
る制度の改變、とくに義和團の敎訓にあつた。「無知の愚民」と  
して切り離された民衆は「中國人」として新しい秩序の中に位置  
づけられたが、その試みは辛亥革命以降の歴史のなかで續けられ  
ていくことになる。

緒論で挙げられた四つの觀點のうち、④「啓蒙と民衆文化」に  
ついては所々で言及されるに過ぎなかつた。それを補うのが補論  
であるが、四つの柱の一つとして、もう少し著者のつっこんだ考  
えを伺いたいところである。本章で挙げられた天津の惜字にまつ  
わる話の一つを紹介したい。上海では、江北人が古紙を買い取り、  
天津まで運んで靴屋に賣り拂い、一斤あたり五十文の利益を得て  
いた。靴屋はその紙で靴底を作つたという。古紙回收にまつわる  
利益を考慮すれば、惜字の活動も象徴的な意味しか持ち得なかつ  
ただろう。さて、本書で考察の対象となつた事象の多くは、排外  
主義に關わる。本書の全體的構圖を亂暴にまとめれば、従来の社  
會統合に排外主義の要素が加わつてナショナリズムひいては新た  
な社會統合が創出されたと言えなくもない。排外主義が著者のい  
う社會統合とどういう關係性にあるのか、社會統合とは單に排外  
主義の裏返しにすぎないのか、分析的な記述があればより理解が  
深まつたであらう。

結論では、最初に提起した四つの課題にそつて本書の考察をま  
とめている。このまとめの部分には「官」という言葉以外に、國  
家や王朝を示す言葉が出てこない。著者は小濱正子『近代上海の  
公共性と國家』（研文出版、二〇〇〇）への書評で、小濱氏の國

家と社會という圖式を批判している。<sup>(8)</sup> すなわち「國家と社會の機  
能的同型性」を想定する以上、國家と社會を對立させるべきでは  
ないと。これについて吉澤氏は自らも直面する困難な問いである  
と述べている。本書はこの問いに解答を與えるものであつたであ  
らうか。

正直なことを言えば、評者にはこの解答を読み取ることができ  
なかつた。この手の議論で評者がいつも戸惑うのは、「國家」や  
「社會」が何を意味するのかということである。「國家」「社會」  
は便利な言葉なので評者もついつい使用するが、その一方で中央  
と地方、官と民（もしくは官、公、私）などの對立項も使用する。  
それぞれ概念は異なるが、重なる部分も大きく、明確な境界はな  
い。著者が「ナショナル」と「ローカル」が交錯し相互に轉換さ  
れる状況を描き出したとき、それは國家と社會の問題に解答を與  
えているともいえるし、國家と社會という視點からの分析を回避  
しているとも考えられるのである。

はつきりしているのは、本書が描く天津と、小濱氏が社團ネッ  
トワークとしての都市（社會）として描く上海との間には、極め  
て大きな違いがあることである。それは天津と上海という場の相  
違によるのか、清末と民國という時期の相違によるのか、公領域  
と近代という視點の相違によるのか、興味深い問題である。

以上、評者の關心にひきつけて、頭に思い浮かんだことを縷々  
述べてきた。強引な點、ピントはずれな點も多々あるに違いない  
が、問題意識というのは正鵠を得た議論ばかりから導き出される  
わけでもないということで赦していただきたい。本書を通じて隨

所に著者の天津・近代に對する造詣の深さが感じられた。この書評では十分に伝えられなかったが、中國都市史のみならず近代史全體にとっても本書の意義は大きい。その後の天津はどうなったのか、天津と他都市あるいは都市と農村の違いはどうなのか、本書は様々な問題意識をかきたててくれる。著者の今後の研究が楽しみでならない。

# 註

- (1) William T. Rowe, *Hankow: Commerce and Society in a Chinese City, 1796-1889*, Stanford: Stanford UP, 1984.
- (2) 拙論「水龍會の誕生」『東洋史研究』五六—二、一九九七。
- (3) 夫馬進『中國善會善堂史研究』同朋舎出版、一九九七にて杭州の善舉の「徭役的性格」を示してランキンの所説を批判している。
- (4) 以下の記述は、葉承慶『鄉志類稿』洞庭東山旅滬同鄉會

刻本、一九三四、薛利華主編『洞庭東山志』上海人民出版社、一九九一を參照した。

- (5) 『順天時報』光緒三十二年六月十二、十三日（李又寧、張玉法主編『近代中國女權運動史料』傳記文學社、一九七五、七〇九—七一二頁）。

- (6) 「ナショナリズムの誕生——反アメリカ運動（一九〇五年）にみる「中國人」意識と同郷結合」、濱下武志・川北稔編『地域の世界史（二）支配の地域史』山川出版社、二〇〇〇。

- (7) 『點石齋書報』行集「藝字被癩」。

- (8) 『東洋史研究』六〇—二、二〇〇一。この書評は、上海を扱った小濱氏と天津を扱った吉澤氏の意見のぶつかり・對話であり興味深い。小濱氏の本著『天津の近代』に對する意見も伺いたいところである。

二〇〇二年二月 名古屋 名古屋大學出版會  
A五判 七十三九六十三頁 六五〇圓